

充実した人生を送るために

後輩に伝えたいこと

【第28回】



拓殖大学学事顧問

全日本学生空手道連盟会長

渡辺 利夫

幸福な人生について

「幸福論」を著したカール・ヒルティ、アラン、バートランド・ラッセルの三人とも、仕事こそが人生の大事であり、人間を幸福に導く最大の要素だと言っています。

人生における仕事の意味を考える時、「今を生きる」とともに、「協働」が重要なポイントとなります。仕事は一人ではできません。人間は仕事を通じて以外に、他の人間と真の意味での共生はできない、そう心すべきです。この考えは武道にも深く通じるのではないのでしょうか。

プロフィール

渡辺 利夫（わたなべ・としお）

1939（昭和14）年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。拓殖大学前総長。第17期学術会議会員。元アジア政経学会理事長。外務大臣表彰。正論大賞。著書

『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）、『開発経済学』（大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（アジア・太平洋賞大賞）、『神経症の時代』（開高健賞正賞）、『アジアを救った近代日本史講義』戦前のグローバリズムと拓殖大学（PHP研究所）、『放哉と山頭火―死を生きる』（ちくま文庫）など。

人生における仕事の意味

洋の東西を問わず、古くから「幸福論」

が随分と世に出てきました。今、私の自宅の書齋を探してみますと、有名なものだけでも、カール・ヒルティ、アラン、バートランド・ラッセルの三冊の幸福論が目に入ります。幸福についての著者の見方はそれぞれ異なっていますが、仕事こそが人生の大事であり、人間を幸福に導く最大の要素だと考えている点では、三冊とも共通しています。

ヒルティの「幸福論」を開きますと、冒頭がまさに「仕事のこと」です。仕事と休息について、ヒルティはこの二つが対立物だと考えるのであれば、人間の不幸は永続的だといって次のように書いています。

「人間の本性は働くようにできている。だから、それを勝手に変えようとすれば、手酷く復讐される。もちろん人間は、とうの昔から休息の楽園からは追放

されている。神は働くことを人間に命じたが、しかし同時に、否応ない働きにもなう慰めをも与えてくださった。だから本当の休息は、ただ活動の最中にのみある」

仕事に没頭するということは、自分以外の何ものかに向かつて努力するという事です。仕事とは、今、自分の目の前にある対象に自分を投げ出すことであり、そこには、過去もなければ未来もありません。ヒルティのいう仕事への没頭とは、要するに「無我夢中」の状態のことです。無我夢中とは、対象に心を奪われ、自分の存在が見えなくなってしまうような状態です。これほどの幸福が他にあるとは思えません。

複雑に錯綜する現代の社会組織の中で人生を歩んでいく以上、自分を取り巻く周囲の人々が、自分に都合のよいように振る舞ってくれることはまずありません。周辺はしばしば自分に敵対的でさえあります。私も自分の周辺を、そのようなものと

して認める他ありません。いかに不条理に見えようとも、むしろ周辺が不条理なものであればこそ、これに自分を積極的に適応させて生きることが、人間としての務めであるというふうに私は考えます。

さらに、人間が病むこともなく、人生を送ることは不可能です。老いて死にいたることは、誰もこれを避けることができません。老い、病み、死ぬことから人間が自由であることはありえません。

社会的不条理や生老病死のことを不安に思い、これに恐怖するのは、私の尊敬する精神医学者の森田正馬の言葉でいえば「人間感情の本来」です。人間感情の本来を本来として、「あるがままに」受け入れるより他ありません。過去を悲観的に振り返り、未来を不安に慮つて、ここにある人生の「今」に身を任すことができず、「今」から逃避し、煩悶と抑鬱の人生に苛まれる。このような人間の苦悩を代弁するものが、実は世に多い「神経症者」だと森田正馬はいうのです。

アランの幸福論

アランの幸福論は、このあたりのところに大変鋭い目を向けて、いくつかの箴言しんげんを私どもに与えてくれていきます。未来への不安や恐怖について、アランはこういっています。

「現在に専念しなさい。刻一刻と前に進んでいる、自分の人生に専念しなさい。この瞬間の後には次の瞬間がある。そしてあなたは今、現に生きているのだから、今生きているように生きていくことは可能なのだ。」

あなたは未来を怖がっている。しかし未来は今のあなたにとつて、まったくわからないものでしかない。それに、思った通りに事が起こることはありえない。あなたの今の苦しみを、今こんなに苦しいからこそ、必ず軽くなるであろうということが出来る。すべては移り変わりすべては過ぎ去る。この格言には悲し

い思いをさせられることが多いが、しかし時には慰めにもなるのだ」

そして、「今」を生きよと次のような励ましを与えてくれるのです。よくぞこう表現してくれたものだと思えるのです。

「人が耐えなければならぬのは現在だけである。過去も未来も無害である。なぜなら過去はもう存在しないし、未来はまだ存在しないのだから。過去と未来が存在するのは、人がそれについて考えるときだけである。つまり、両方とも印象であり実体がない。それなのに、私たちは、過去に対する後悔と未来に対する不安をわざわざ作り出しているのである」

仕事と人間関係

人間にとつての仕事の意味を考える時、もう一つ重要なポイントがあります。仕事

は一人ではできません。多くの人々との「協働」、つまり人間関係のネットワークの中でなされるものが仕事です。

人間とは、元来が人間関係のことです。人間とは、もともと「世の中」「世間」「人の世」の意味なのです。つまり、人間とは、人と人との「間」に存在するものです。家族や友人関係はもとよりですが、仕事を通じてつくられる人間関係において、私どもは自分の立ち位置、自分の役割がきわめて明瞭なものとして自覚されます。

学校や趣味を通じての人間関係においては、自分の位置や役割はそれほど明瞭に意識されることはありません。自分の位置や役割が自分の気に入らないものであれば、そこから逃げていくことだつてできなくはありません。ですから、学校や趣味を通じての人間関係は、さして強いものではありません。とかく「薄情」なものです。

しかし仕事は、これによって報酬を得て、両親や妻子を養うという人生の大事を目的としているものです。ですから、気分によつて、そう簡単に仕事から逃げること

はできません。仕事であれば、自分の位置や役割は、職場の人間の上下関係によっていわば強制的に決定されます。

もちろん同列のポジションにおかれた同僚とは、横の協力関係におかれます。縦と横に繋がる人間関係のネットワークの中で、自分の位置と役割は、重層的に形成されます。重層的な人間関係がスムーズに展開している時に、人は他の人々と共に生きて在る「共生感」にめざめ、その中に幸福を感じ取ります。

人間が「個」として生きることが不可能です。仮に可能であっても、これが幸せに繋がることはまずありません。もともと、自然生命体は、個ではなく「類」として生きるよう運命づけられて、この世に存在しているのです。そして、人間は仕事を通じて以外に、他の人間と真の意味での共生はできない、そう心すべきではないでしょうか。

武道を学ぶ者たちへ

私はこの小論を通じて、仕事、仕事、仕事こそ人生だ、といった趣旨のことを書いてきました。しかし、ここまで書き進めて、武道についての言及を失念していることに気づきました。

日本武道館によりますと、武道とは「武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、人間形成の道である」と定義されています。

武道には必ずや戦う相手があり、味方があり、それぞれがひとつの強固な人間集団です。その人間集団の中で形づくられる人々の関係は、縦と横に繋がる役割のまことに整然たるものです。ここでは、個々の武芸者の役割は実にはつきりとしていて、その役割を肅として全うすることが勝利をもたらすのです。

そして、そのことによって武芸者は他の

武芸者と強い絆で結ばれ、ここに仕事に没入する者同士の間で生まれる「共生感」と同質の、人間としての幸せが生まれてくるのだらうと思われまます。

もう一ついえば、武道とは「今」を生きていることです。瞬時の技を競う競い合う者は、過去もなければ未来もありません。ただ一瞬の「今」を全身全霊をかけて戦う。これが武道なのです。過去を悔悛し未来を不安に慮る、こういう病的精神から脱する術のエッセンスが武道の中にはすべて詰め込まれています。

仕事と武道には深く通じるものがある、そう主張して小論を閉じることになります。